

IMAGE DIAGNOSIS ターゲット別！ 画像診断 お助けガイド

序文

画像診断の進歩には目を見張るものがあり、現在もあるたくさんの画像検査のテキストによって眼科医は日々新しい画像診断に関する知識を蓄えていく必要があります。ただ、患者さんに相対したとき、まずは最も適切な検査は何かということから考えなくてはなりません。しかし、いつもすぐに頭に浮かぶでしょうか？その検査結果はどのように判定されるのでしょうか？

眼科専門医試験でもオールラウンドな知識が要求されていることからおわかりのように、眼科を専門とする医師はできるだけ幅広い知識を常にアップデートされた形で準備して診療に対応する必要があります。今回の増刊号ではそのようなオールラウンドに活躍されている眼科専門医、あるいは専門医を目指す新進の眼科学徒の日常診療に少しでも役に立つような座右の書、実践の書となるような切り口で企画し、分担執筆者にはそれぞれの分野においてわが国で最も活躍の先生方を推薦させていただきました。

最初の章では各分野のトップレベルの先生方が、眼組織の部位・構造別に、歯切れの良いタッチで、診断治療、解析に必要な画像を説明されています。ぜひ楽しんでお読みください。また、次の章では外傷時、手術前後という差し迫ったタイミングで何を行ったらよいか日頃からの備えが大切ですが、その分野にたくさんの臨床経験をもつ先生方にタイミング別、手術別に述べていただいております。

さらに、画像診断は機能診断を凌駕するともいえる時代になってきましたが、最終的に重要なのはやはり“目のはたらき”です。最新の、また未来の画像診断がどこまで機能を語れるのか、これまでにない斬新な内容の章となっています。さて、小児について困ったことはありませんか？ 特別に設けた小児の章では、各分野の第一線で活躍されている先生からのメッセージが伝わってきます。

最後の章では、動物の疾患モデルについても執筆されています。日頃論文や学会で発表を聞いたときにいったいどのようにして疾患のモデルが作られているか、つい取り付きにくくなってしまいますが、これらの章では、たくさんの一流論文を書かれた先生により、短くわかりやすく解説されており、若手医師が研究にも興味をもっていただくだけでなく臨床家にとっても興味深い項目となっています。

お助けガイドになるよう各執筆者の先生が全力投球で書いてくださった感があります。座右に置いていただき、ぜひ実践に役立てていただこうと企画したのですが、なんだか読みふけてしまいそうな1冊となりました。ご執筆いただいた先生に感謝し、はじめの文とさせていただきます。

寺崎浩子 (名古屋大学)